

平成27年度第1回（英語教育・コミュニケーション関係学）分野合同委員会議事概要  
学系別FD/ICT活用研究委員会（英語教育）  
サイバー・キャンパス・コンソーシアム運営委員会（コミュニケーション関係学）

I. 日時：平成28年1月9日（土）15：00～17：00

II. 場所：私立大学情報教育協会事務局

III. 出席者：英語教育

田中委員長、松村委員、原田委員、五十嵐アドバイザー  
コミュニケーション関係学

阿部委員

事務局 井端事務局長、森下、中村

III. 議事概要

1. 出席委員の紹介

委員会開催にあたり、英語教育・コミュニケーション関係学の出席委員の自己紹介が行われた。

2. 報告・検討の概要

(1) 平成27年度の事業計画の説明の後に平成26年度の事業報告書から昨年度の分野別のアクティブ・ラーニング対話集会の活動内容が報告された。

(2) 平成27年度の活動計画

資料①により、分野連携による対話集会の目的及び開催方針の説明が説明され、対話集会の進め方について意見交換された。

3. 意見交換の概要

(1) 対話集会の目的、計画、進め方などについて

学生の主体性を引き出し、伸ばす授業が求められることから自ら問題を発見し、答えを見出し実践できる力を育むアクティブ・ラーニングについて、昨年度は分野ごとにアクティブ・ラーニングのイメージについて共有した。今年度は「対話を通じて課題を発見し、課題解決に向けた学びを主体的・協働的・創造的に展開していくアクティブ・ラーニングの手法とそれを実現していくための授業運営の工夫」、「組織的に推進していくため教学マネジメントの工夫」について対話集会を通じて考察を行う。

・ 対話集会は、分野連携の9のグループ編成で行うこととしている。

・ 英語教育・コミュニケーション関係学グループを1つのグループとして分野連携で対話集会を開催する。

・ 分野共通のテーマでアクティブ・ラーニングを考えるのではなく、各分野の先生の知見、分野ごとの視点でテーマを検討するのがねらいである。

(2) 話題提供や意見交換のテーマなどについて委員の意見

・ 今回の対話集会は意見交換が大事であり、アクティブ・ラーニングに関するテーマでは、質保証を促進するための能動的学修の工夫、能動的学修の評価方法と評価基準の設定、教学マネジメントでは教育の質的転換を推進・普及するための教育政策、分野横断、教員連携による教育体制の工夫等を意見交換することを目的としたい。

・ 英語は英語、コミュニケーションはコミュニケーションという背景をもって、こういう議論を展開したい。

・ アクティブ・ラーニングで予習復習を徹底させるとすると、科目が多すぎ、再編成する必要から学位プログラム中心の科目の問題を考えようというきっかけになった。そういう本質的な話題を対話集会で展開していこうということ。

- 英語とコミュニケーション以外にも全分野案内することで分野横断で昨年とは違うスタイルで対話集会を考えている。
- 本質的な話題に対してどう考えたらいいのかということをもみんなで知恵を寄せ合う。そういうステージをかなり高くした対話集会にしたいと思う。
- 意見交換の内容はいろいろあると思うが、①の資料の3ページ目のところを、例として、事務局のほうでいくつか挙げさせていただいている。このようなテーマをぜひ意見交換したらどうだろうかというのそれぞれのテーマで2つずつくらい検討したい。
- 1つでも広がっていくので1つでも良い、例えば「教養と専門の連携」ではそこから教学マネジメントまで、何で出来ないのか、その原因はどこに、どうしたらいいと思うとか、どんどん話題が広がっていくと思う。
- 専門教養教育としての英語の教育がどうあるべきかというあたりが、一つのポイントなのかという気がする。
- 英語教員は例えば私看護学科の英語の教育や職能学科なんかを持ったりするが、教室の中だけで完結している世界で、上と全然繋がっていない。実際にどう繋がっているかというのは全然見えないが、それが最後の最後の教学システムのところに繋がって行く話だと思。それぞれ自分の家だけやっているけれども、それが商店街にもならないし、デパートにもならないというのが現状。これをどうしていくのが組織的、カリキュラムの問題に繋がっていくところ。
- 英語の教員はもっと専門分野と連携しようとするが反応が無く、共通理解になっていない。専門分野の方に話ししていただきこの連携についてどう考えるかという議論が必要と思う。
- 数学と経済でも同じような話あり、数学先生は意識しているのだけれども、向こうの先生はなかなか理解してもらえず、単発的なトライで終わってしまう。経営数学とか経済数学とを専門の先生が教えなおしているような。
- たぶん教え直すのです。専門の先生が、それで駄目だ駄目だと非難しても、何も改善にならない。
- 私も看護1年間やって、一番難しいことは、看護の新しい単語を覚えてくる、いろいろな病名とか対処療法とか、でもやはり基本的な英語は読めないですよ。
- 授業の中で英語を読めるようにもしなければいけないし、そういう知識をつけていかないといけない。そのへんが本当に行ったり来たりの世界ですね。たぶん看護の専門の方からいけば、何でこんな英語が読めないだろうというオーダーが来ると思うのですけれども、こっちはそっちばかり集中していると、結局専門例の橋渡しができなくなっていくという。そのあたりで、橋のまだ両側に立っていて、なかなか端を両側に渡り出していない状態です。渡りかけるのですけれども、ある種、こちらの岸に戻ってしまう。
- 文部科学省は、あと2年後です。教職の先生方の免許で時事的な話題に関して肯定、否定にわかれて討論できるようなコミュニケーションができるようにしたいといっている。
- 背景は小学校5年、6年生から英語を体験させる場を作っていこうと。そうするとそれがどんどん中学高校上がってきます。ですから大学はもう基礎教育をやっているものではなくて、むしろできるだけ実践の場面で英語を実際に使ってみて、失敗を経験させて、その中から自分たちで、自分で学びを作っていく、また大学としてはそれをフォローする、そういうふうな教育スタイルになるのではないですか。
- 失敗でいいから、どんどん対峙させる。失敗を経験させないと駄目です失敗を経験させたときに、今度は先生が手伝うのではなくて、できれば上級生が上手くその間に入る。そういうふうな授業のスタイルを考えていかないとなかなかうまくいかない。
- そういう意味で、英語で書いたりするという能力を大学の中でどんどんいろいろな場面

で活用するようなスタイルにしていけないといけない。

- ・ 接点を比較的とりやすいのは工学ですか。授業の高さからいう言い方からすれば、だからやはり今年度やるとすれば、工学系あたりの先生との接点が比較的、経済・経営の先生との接点というのは比較的難しい。たぶん医学もちょっとジャンプが強すぎるので、比較的工学の人が論文発表とか、少し、前の山本先生の話ではないですけども、論文発表とかレポート作成とかで、かなり英語、すべて英語でしなければいけないので、そこに対する英語の要求は高いと思うのです。そのあたりが一つの分野的な接点という、数学と経済・経営ならば、英語と工学みたいなところあたりは少し接点がありうるのかという気がする。
- ・ 共通教育と専門教育の連携を、連携についての問題点みたいなことを、どなたかに話してもらいたいです。誰かいないかな。先生のところいるでしょう。
- ・ 去年の英語の集会に来た先生で、立教大学で英語を教えている先生がいるけれども、鳥飼先生。一緒に仕事している方が溜箭先生という英米法の分野の若手の准教授レベルの先生で、お2人でコーパス言語学の手法を使って、法律分野の英語で、大学院に進んだ時に必要な語彙というのは何かと。それを実際に教科書にする、金星堂とかああいう一般の教科書からすでに出しているものを一冊作られていて。今後さらにその研究を進め得るということで、法律分野のことが学べるような辞書を開発していきたいということで、科研費のプロジェクトを進めているという感じです。教科書を作っているというので、実際に教えるというところも1、2年生の普通の英語の授業の中で実際に教えるということもやっぺらっしやる。鳥飼慎一郎先生、そうです。
- ・ コーパス言語学、司法英語、英語教育学。
- ・ 学部は法学の卒業で、その後言語学のほうに進んで、立教では英語の先生ですけども、今法学の若手の先生と一緒に研究を進めている。
- ・ その先生がさっき言った教養と専門の接点の問題なんかを少し掘り下げて、できますか。
- ・ ちょっとそこを相談することは出来るかもしれないですけども、ただここで言っている議論とはちょっと意識が違うかもしれません。
- ・ ちょっと重箱の隅をつつくような話だとつまらなくなってしまうのでやはり大きな海原で話を出来る人が欲しいと思いますけれども。場合によっては工学系1人、文系1人と選ぶ手もある。
- ・ 英語でない先生で、ようするに専門の分野でいろいろなことを、学びを展開していくときに、そういう英語とかコミュニケーションというものについて、理解をしていくいろいろな話題を提案できる先生が必要だということです。
- ・ 医療看護系からはありませんか。人に言っぺらっしいけない仕事を今やっているんですけど、見てみると医療看護系の英語教育、それとコミュニケーションで2020年に向けてそういう人材が求められてきた。あるいは体育系でもボランティアの活動でそういうのが求められた先生方、結構目に付けて、何か専門分野のほうでそういうことを意識される方で、ある程度の理解がある方がいらっしやるかなと。なかなか難しいですね。
- ・ 工学系で英語教育がいろいろ実践されている方は、特にネイティブの先生は、工学の修士とか博士を持っている先生が多いので、ある意味そういう方が両側が見えていいのではないですか。
- ・ 山本英一先生はかなり具体的な取組みを行っている。「専門分野の必要性に応じて、適切なレベルの英語語彙・英語表現を使用できる。」を実現するための英語教育モデル。
- ・ 専門教員と英語教員が連携してプラットフォームを作って、専門知識は専門教員が、それから英語は英語教員が対等な環境を保ちながら、協働関係を作っていく展開していく。だからこれは、山本先生に今、提案として僕はしてもらえれば一番いいかと思うんですけど。
- ・ 一番大事なのは、専門教員と英語教員の協働した授業設計というか、授業デザインという、まさに一番先生方がアンタタッチャブルな部分を、いちおう提案してもらって、それについて意見交換するというのはいいことだと思います。

- ・ テーマとしては、汎用的能力でいいですか、汎用的能力と専門的能力の統合ということにしましょう。汎用的能力と専門的能力の統合を先生方で考えましょうという。とても大事なことです。逆にいうと、それは教学マネジメントの話題なのです。
- ・ アクティブ・ラーニングのほうは、実はさっき、コミュニケーションの北根先生から提案があった事例。
- ・ 対話集会のイメージは以下の内容です。はじめに先生方が培ってきたさまざまな教授法や工夫のノウハウを共有し、それらがアクティブ・ラーニングを支援する活動であることを再認識します。その上で個々の先生方が保有している教授法を、一つの授業デザインとしてまとめるための、組織的な取り組み方法について議論します。特にLMSを用いてどのように授業ノウハウやデザインを共有したりカスタマイズしたりすることができるのか、情報公開をしたいと思います。
- ・ どちらかという、知識・技能・態度の確認定着を目指したアクティブ・ラーニングのところに、LMSを活用した事前・事後学修の方略があるので、そこに絡めて検討するテーマかと思う。
- ・ 知識の定着というのは英語でもコミュニケーションでも必要なので、知識の定着の手法についてアクティブ・ラーニングとして議論するというのはどうなのですか。早稲田なんかどんどん、ネットを使って学生が自分で勉強できる、eラーニングやっていたりしますがけれども、教室の授業の中では出来るだけネイティブとやってもらって、教室の外ではプラットフォームの上で学びを展開できるようにする。eラーニングを展開できるようにするというようなことなのですか。
- ・ 英語の教員が皆悩んでいるのはアウトプットの確認作業、本当に学生がアウトプットして、自分で確認して、また前の、周りの学生からそれを見て、自分の向上に繋げていくという、そういう事例があったら面白いと思う。
- ・ 奈良行った時に、高校生が外国人を囲っていた、高校生が。何やっているのかと思ったら授業なのです。ようするに語りかけさせる。遠目に見ていたら授業なのです。アウトプットなのです。
- ・ 例えば今、先生が言われたアウトプットをどういう場でしますかというのは、教室の中でさせるのもあれば、外で何か作ってさせるのもあるのではないのという提示なのです。なるほどと思って。そういうところを議論するというのは、ようするに、こういうコミュニケーションの活用をどう設定するかとか。その時の評価をどうやって評価させるかとか、そんなの評価しなくていいのだと、まず自分で気づきをさせることが狙いなのだから、失敗させることが狙いなのだからということでもいいのかどうかとか、そういう知識を定着させて、活用させる場を、どういうふうに授業で設計したらいいのか、授業設計したらいいのかというテーマは面白い。それはいいのではないですか。
- ・ そういう事例が一つ具体的にあれば、面白いですね。
- ・ 京都外大の小野先生でしたっけ、観光させて、清水とか学生連れて行って、ネイティブにその学生が案内して回ると。それでどれくらい通じるかとやってという話を、前は小野先生がちょっとやっておられたのがあるのですけれども。それも面白いですね。
- ・ 全方位でいろいろなジャンルを含めてアウトプットさせるのではなくて、観光なら観光でいいのではないですか。ある程度予測をさせながら、そして自分の持っている力で語りかける。向こうから予定もしないような内容が返ってきて、お天気の話とか、それから交通機関はどうしたらいいとか、そういうようなやり取りというのは、とても勉強になります。
- ・ ただ、京都外大の小野先生の事例は授業でなくクラブ活動なので今回の内容とは異なるます。
- ・ 似たような事例だと、東京国際大学の英語コミュニケーション学部が、小江戸川越なので、観光、ガイドとか、あと小さな冊子を学部で作らせた事例がある。小江戸川越プロジェクトと

して現代GPを取った。

- ・ 理科大がキッコーマンの近くにいるので、キッコーマンの工場案内をする事例、理科大とキッコーマンが工場案内とか、流山市が何かやっている気がする。キッコーマンに国から来た人を案内をするというのを英語で野田市がやっているかも知れない。
- ・ 聞いてもらわないといけないので調べてもらえますが。
- ・ 早稲田でいうと、昔やっていたプロフェッショナルワークショップというので、企業からの協力で企画をして、学生がプレゼンテーションをし、企業側からの評価をいただくという枠はあったのです。英語ではないですけど。
- ・ そういう事例があったら面白い。求めているのは、アウトプットを自分以外で、どういうふうにして確認出来て、学生に気づかせて、それをもう少し言えば、学生達の目の中で晒して、もうそれでも十分評価だと思うのです。
- ・ マネジメントのところが決まったので、アクティブ・ラーニングのところはどうか。知識の定着のはどうか。
- ・ コミュニケーション関係学の北根先生からいただいた内容は、例えばLMS使って知識、技能、態度の確認・定着を目指したアクティブ・ラーニング、LMSを活用した事前・事後学修の学習成果の定着の確認。これにしてみたらどうかと思ったのです、一つは。もう一つ異分野との意見交換・発想が大事、これももう一つ上になってしまうので、ここまではとても難しいのではないかと。ここですと、学んだ知識の態度、活用を使ってみるという話しかな。これではちょっと難しいのではないかなと。もう一つが山本先生にお願いした、先ほどの汎用的能力と専門的能力、この取り組みの結果、連携、授業運営の工夫みたいなテーマに行ってしまうと。北根先生の最後の2行あたりは、皆さんが持っている課題であることはあるのです。LMSを用いてどのような教授法を共有したり、カスタマイズすることが出来るのかあたりはみな。意見交換への導きにはなるのですけれども、そのバックがもうちょっとあったほうが良いのでしょうか。
- ・ 授業でいろいろ何かアクティブ・ラーニングをしているように思うのですが、それが本来アクティブ・ラーニングが目指すものなのかどうなのかという、そこの差あたりは、ちょっと埋めたいという気がします。
- ・ 知識の修得にむけた学修をドリル的にやっているだけであって、それを自分の中で一回返してやるという、そこの距離を、あるいは何か仕組みみたいなものとか、それがあって、この最後の2行くらいのところの集約していくのだろうなという気がするのです。けっこう1クラス50人とか40人でやっている中で、それができるかというのが。
- ・ 英語で知識の総合といったってちょっと難しいかもしれない。現場でもうそういう意味では産業界、地域社会との英語教育という話は欲しいですね。どちらかが良いのですけど。地域社会、産業界とか、3つあったらなおいいでしょうけれども。
- ・ 英語ディスカッション授業におけるアクティブ・ラーニング型授業授業になるかどうかかわからないのですが、キッコーマンでいいと思うのですけども。
- ・ 手法としては使えるのですけれども、手法は、アウトカムという大きなテーマ。さっき言われたのはアウトプットだと、アウトプットをどういうふうに設計したらいいのかということです。手法としてはちょっとそこからステージを上げていかないといけない。
- ・ やはり大学教育の在り方ですね。正課教育として。では誰がどうやって評価するのということになるわけです。連れて行くところまでいいのです。ヒントになるのです。そうか、そうやって対外経験させて、何か。それは誰がどうやって評価するのだといった時に、学外でガイドされた人達が点数をつけるのか、よく分からないけど。
- ・ 学生の気づきで止まってしまうですね。
  - ・ 地域社会との連携というところで、例えば原田先生がインターカーを務めてもらって、それでキッコーマンの人と組んで、話題提供をしてもらう。

- ・ 原田先生がインテーカーを務めて、それでキッコーマンの人と2人で「コミュニケーション能力を育成するための地域社会との連携」として話題提供してもらう。
- ・ 汎用的能力と専門的能力の統合は山本先生と工学の先生に来ていただいて、2人でお話いただく。
- ・ 2つの話題提供を行い、意見交換では、知識・技能・態度の定着を目指したアクティブ・ラーニングと教学マネジメント「専門的能力の統合について」とする。そうすると地域社会の連携や双方向型授業などにも発展する。
- ・ 産業界・地域社会との双方向型連携授業で問題の解決という意味でPBLまで行くかも知れない。
- ・ 活用だとすると、評価はどうするのだというのが出てくるので「評価」を入れ、「知識・技能・態度の活用・評価を目指したアクティブ・ラーニング」とする。
- ・ 知識と技能は、程度評価の方法が見えるが、態度をどう評価するのだという、非常に大きい問題があが、面接などでこちら向いてちゃんと話すか、答えようとする意欲を持っているか等のアティテュードで評価することで落とし込めそうな話になる。
- ・ 教学マネジメントでは、汎用と専門ということになると、それをやるための科目編成の戦略みたいなのがテーマになるのではないか。

#### まとめ

1. 対話集会の話題提供
  - ・ 「コミュニケーション能力を育成するための地域社会との連携」をテーマに原田先生とキッコーマンの方に話題提供をお願いします。
  - ・ 「汎用的能力と専門的能力の統合」をテーマに山本先生と工学部の先生に話題提供をお願いします。
2. 意見交換のテーマ
  - <アクティブ・ラーニング>
    - ・ 知識・技能・態度の活用・評価を目指したアクティブ・ラーニング  
(産業界・地域社会との双方向型授業、問題発見・解決型 PBL 授業の方略)
  - <教学マネジメント>
    - ・ 汎用的能力と専門的能力の獲得に向けた授業運営の工夫
3. 今後の日程
  - ・ 対話集会は3月20日、21を候補にする。
  - ・ 次回の日程は、2月1日、7日、8日の3日間で決める。
  - ・ 関西大学山本先生は田中委員長、事務局でお願いします。
  - ・ キッコーマンの方については原田先生に確認いただく。
  - ・ 会場の設定は早稲田大学法学部の会議室で調整いただく。

#### V. 今後の予定

次回是对話集会の開催要項を検討することにした。また、できれば、対話集会のテーマ、取り組みの事例、意見発表してもらえような話題について事例を自薦他薦問わず持ち寄っていただき開催要項をとりまとめることにした。